

(トップページ：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(サウジアラビア：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

マイライブラリー：0207

(注)本稿は11月6日から17日まで「アラビア半島定点観測」に4回にわたり掲載したレポートをまとめたものです。

2011.11.17

前田 高行

## (ニュース解説)振り出しに戻ったサウド家の後継者問題、サルマン王子が国防相に

目次	頁
1. 新国防相にサルマン王子	1
2. 次第に頭角を現す御三家の第三世代	3
3. サウド家を守る三本の柱	3
4. 国防省は誰のもの？	4
5. 振り出しに戻ったサウド家の後継者問題	5

サウジアラビアのスルタン皇太子が10月22日に死去し、27日に実弟のナイフ内相が新しい皇太子に即位したことについては、それぞれ「サウジアラビア皇太子の死去と後継者選定について」<sup>1</sup>及び「サウジアラビア皇太子にナイフ内相」<sup>2</sup>で解説した。そして今回11月6日付けでサルマン現リヤド州知事を国防相に任命する勅令が発令された。同じ日にリヤド知事の後任を含め数名の王族の人事も発令されたので、本稿ではそれらを踏まえサルマン国防相任命の背景及びサウド家の後継者問題について解説する。

### 1. 新国防相にサルマン王子



新国防相に任命されたサルマン王子は1936年生まれ(75歳)。アブドルアジズ初代国王の25番目の息子であり、母親を同じくする7人兄弟、いわゆるスデイリ・セブンの6番目の弟である。長兄が故ファハド第5代国王であり、次兄が先日亡くなったスルタン、そして四番目の兄が今回スルタンの跡を継いで皇太子になったナイフ内相である。サルマンは1962年にナイフの後任としてリヤド州知事に就任して以来半世紀近くその地位を保っているが、これはとりもなおさずファハド、スルタン、ナイフなどの兄たちのバック・アップのおかげであり、今回の国防相就任は彼が常にサウド家とその政権の中枢部にいた賜物である。

サルマンにはスデイリ家出身のスルタナ妃(今年 8 月 71 歳で死亡)との間にもうけた 6 人の息子を含め 10 人の息子がいる。長男のファハドは 2001 年に心臓病で亡くなっている。次男のスルタンはアラブ初の宇宙飛行士として有名であり、現在は政府の観光促進機関 STC のトップを務めている。三男のアハマドは 2002 年に死亡したが、詳しい死因が公表されなかった。このため一部で 9.11 事件に関与したためではないかとの噂が流れたほどである。

イスラムでは寄付(ザカート)や慈善行為が信者の義務とされており、サルマンは特に熱心である。彼は国内での慈善事業に限らず、海外でも 1980 年代末のアフガニスタン戦争ではイスラム戦士(ムジャヒディン・ハルク)のゲリラ活動に対するパトロンの一であった。この戦争は共産主義ソ連に対する聖戦(ジハード)と位置づけられ、イスラム諸国特に湾岸の富裕な国々ではこぞって戦費調達のための大々的な募金活動が行われたが、サルマンはこれに深く関与したと言われる。

アフガン戦争は米国とイスラム諸国が手を握った歴史上唯一の戦争であった。米国はこの勝利により米ソ対立の冷戦を終結させ、その後の米国一国覇権主義(パックス・アメリカナ)を確立した。一方イスラム諸国は中央アジアのイスラム地域をソ連共産主義から解放独立させた、と言うことでイスラムの盟主を自認するサウジアラビアにとっても大きな勝利だった。

しかしその後ジハード(聖戦)を戦ったイスラム戦士のうちの過激派グループは世界イスラム革命を目指し米国に対してテロ活動を開始した。それがサウジアラビアの豪商の息子オサマ・ビン・ラディン率いる「アル・カイダ」であり、ついに彼らは 9.11 同時多発テロ事件を引き起こしたのである。この事件を契機に米国はアル・カイダなどイスラム過激派テロ組織撲滅のため全世界的規模の対テロ戦争を開始した。その作戦の一つがテロの資金源を断つことである。米国はイスラム諸国で幅広く集められた募金がマネー・ロンダリング(資金洗浄)されてテロ組織に流れているとみなし、特に 9.11 同時多発テロ事件の犯人の多くを占めていたサウジアラビアに目をつけた。その中で浮かび上がったのがサルマン・ルートであった。しかしサルマン・ルートが実際に存在したのかどうか、或いは彼自身が積極的に資金供与或いは資金洗浄に関与していたかは明らかにならないまま問題は闇に葬られた。

最近のサルマンはもっぱらサウド家一族内での勢力維持に腐心しているようであり、特に実兄のスルタンに対しては腰巾着とも言えるほど密着してきた。スルタンがニューヨーク及びモロッコでがんの手術と術後の静養を行ったとき、彼はリヤド州知事としての公務を副知事のサッターム(今回知事に昇格)に委ね、数か月もの間スルタンに付き添っていたほどである。それが彼の保身のためであったのか、或いはサウド家の中でのスデイリ・セブンの勢力維持のためであったのか、いずれにしても彼が権謀術策を駆使したことは間違いないであろう。彼が今回国防相になったことに対して外部ではサウド家の序列から当然であるとの見方もある。ただ今回の一連の人事を見る限りでは彼の立場或いはサルマンの子息たちの将来が盤石になったとは必ずしも断言できない。彼の国防相就任と同時に発令された他の王族の人事を見るとそのような疑問が出てくるのである。

## 2. 次第に頭角を現す御三家の第三世代

今回の勅令ではサルマンの国防相任命と共に数名の王族人事が発令された。後任のリヤド州知事には副知事のサッターム王子(1943年生、アブドルアジズ初代国王 34男)が昇格した。また国防省副大臣にはスルタンの息子ハーリド王子(1949年生)が任命され、ナイフ皇太子の息子サウド王子(1951年生)は皇太子府長官に任命された。彼らは初代国王の孫でいわゆる第三世代の王族である。そしてステイリ・セブンの三番目の息子(即ちナイフ皇太子の兄)に当たる航空・国防副大臣のアブドルラハマン王子が退任した。政権中枢で第三世代が台頭しつつあることを示している。

このように第二世代から第三世代への権力移譲は徐々に進行しており、昨年11月にはアブダラー国王が国家警備隊司令官の地位を息子のムッテーブ王子に譲った(この時同時に国王は20男の異母弟であったバドル副司令官を退任させている)<sup>3</sup>。また今年7月にはナイフの息子ムハンマドが内務相アドバイザーに登用されたが、彼は今回皇太子府長官に任命されたサウド王子の実弟である。現内閣には既にサウド外相(故ファイサル第三代国王子息)及びアブドルアジズ国務相(故ファハド第五代国王子息)の2名の第三世代王族がいるが、これはむしろ例外的なケースであり第三世代の登用は最近漸く本格化しはじめたところである。

第三世代の男子王族の人数は家系図で判明している限りでもアブダラー国王14人、故スルタン前皇太子13人など、全体では250人以上に達する。これらの第三世代の王子が政権の中枢を担う時代がいずれ来るであろう。但しポストの数には限りがあり登用の道はかなり狭いと言わざるを得ない。そのため結局これまで政権を担ってきたアブダラー国王、ナイフ皇太子或いはスルタン前皇太子の子息たちが有利であることに間違いはなく、これら御三家に続くのがファハド前国王、サルマン国防相或いはサウド外相、ハーリド・マッカ州知事を擁するファイサル第三代国王の三家族であろう。

(注)これらの有力家系の動向については拙稿「世代交代に備えるサウド家御三家」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0197SaudThreeFamilies.pdf>

## 3. サウド家を守る三本の柱

今回の国防省人事ではサルマン大臣の誕生と同時に、彼の実兄アブドルラハマン王子が副大臣を退任し、替わってスルタン前大臣の息子ハーリド(1949年生)が副大臣に昇格している。このことから国防相ポストはいずれハーリドが継ぐものと思われる。

サウジアラビアとは「サウド家のアラビア」という意味であり、同国は文字通りサウド家が絶対的な力を握っている。その支配力は国防省の正規軍(陸海空軍)、国家警備隊を構成する部族兵力及び内務省傘下の警察・治安維持部隊の三本柱で支えられている。英国のシンクタンク「国際戦略研究所」の「The Military Balance 2010」によればサウジアラビアの陸海空軍の兵力は12万強と言われる<sup>4</sup>。この正規軍を統括している国防省を50年近く支配してきたのがスルタンであった。欧米の最新兵器を装備した正規軍はアラビア半島周辺国に対する紛争抑止力として存在感を示し、イラク戦争ではGCC6カ国の合同軍「半島の楯」の主力部隊として参戦している。また最近ではイエメンの国際テロ組織「アラビア半島のアル・カイダ」に対して組織の拠点を越境攻

撃している。

これに対し国家警備隊は国内各地のベドウィン部族を支配するための軍事組織であり、1963年以來アブダッラー(現国王)が司令官を務め昨年11月には息子のムッテーブ王子がその職を引き継いだ(上述)。国家警備隊の兵力は10万人規模と言われ正規軍に匹敵する規模である(「Military Balance」)。国家警備隊は部族を監視すると言うより、むしろ彼らを懐柔する目的が強く、各地の警備隊長にはその地の有力部族長が任命され、兵士には部族の若者が採用されている。その経費は全て中央政府(即ちサウド家)が負担しており、警備隊は地方の部族長が自身の部族を支配するための道具であり、同時に部族の若者の失業対策となっているのである。つまりサウド家は豊富なオイルマネーの一部を国家警備隊と言う組織を通じて地方の部族に注ぎ込むことにより部族を懐柔し反乱を防ぐセーフティーネットを築いていると言えよう。そのセーフティーネットを握っているのがアブダッラーである。彼に対する国内諸部族の信頼が厚いのはそのためとも言える。

さらに警察及び治安部隊を配下に置く内務省はナイフ皇太子兼内務相と彼の息子が握っている。サウジアラビアはスンニ派教徒が多数を占めているがアラビア湾沿岸の産油地帯には数多くのシーア派が住んでおり、内務省は彼らのデモ活動を厳しく監視している。今年発生したバハレーンの騒擾事件では内務省が治安部隊を派遣して事件の鎮圧に協力している。また国内のイスラム過激派アル・カイダは内務省の強力な掃討作戦により鳴りを潜めているが、ナイフの息子が自爆テロに狙われたように今も目が離せない(前稿「サウジアラビア皇太子にナイフ内相」参照)。一方、民主化を求める国内進歩派、或いは権利の拡大を主張して自動車を運転するなど女性活動家の動きも厳しく取り締まっている。

このようにサウジアラビア国内外の防衛と治安を担う三つの組織は、三家系一即ち国防省のスルタン家、国家警備隊のアブダッラー家、そして内務省のナイフ家がそれぞれ一族で固めているのである。

#### 4. 国防省は誰のもの？

スルタンが息子ハーリドに国防大臣を継がせようとしたことは疑いない。そのため彼は実弟のアブドルラハマンを副大臣に据えハーリドを次官(Assistant Minister)にまで引き上げた。ハーリドは今年62歳である。スルタンが国防・航空大臣になったのは30歳そこそこであったから、ハーリドは大臣になってもおかしくない年齢である。しかし彼は次官のままであった。そのような中で昨年アブダッラーは国家警備隊司令官のポストを息子ミッテーブに譲り渡した。サウジアラビアでは国王・皇太子の生前譲位は第二代サウド国王を除いて例がないのと同様、スルタンの国防相もナイフの内務相も終身ポストの様相を呈している。スルタンが皇太子に即位した時(2005年)或いはナイフが第二副首相に選ばれた時(2009年)、彼はアブドルラハマンを引退させハーリドを副大臣にするチャンスがあった。しかし死ぬまでトップ人事を変えなかったため新国防相にはスルタンの実弟サルマンが任命された。その結果サルマンは彼の兄と同様死ぬまで大臣ポストを続ける可能性が高い。

ハーリドを始めスルタン家の息子達がそのような状況にいつまでも我慢できるとは思えない。

何故なら国防省には巨大な利権がからんでいるからである。かつての国防・航空省はオイル・マネーにあかせて最新鋭戦闘機を含む巨額の兵器を調達し、また国営サウジ航空のための民間ジェット機の購入メーカー決定に絶対的な権限を有していた。最終決定権限を持つ国防相のポストはまさに利権の元締めである。報道の自由が無く一般国民に知る権利の無いサウジアラビアでは、王族閣僚の利益誘導が表面化することは全くない。同国では石油取引こそ王族の利権の源泉であると言う考えが広く信じられているが利権が絡む余地は少ないのが事実である。石油の生産と輸出はオープンに行われており、石油は国家の基幹産業であるだけに個人的な利益誘導が難しく同時に他の王族の目が光っているからである（勿論王族による利益誘導は皆無ではなかろうが）。

しかし兵器買い付けのように特定の省庁が行う商行為は賄賂の温床である。これまでも数十億ドル規模と言われる航空機や兵器の調達では常にスルタンとその一族の汚職疑惑が海外のメディアをにぎわせている。スルトンの息子バンドル王子（現国家安全会議事務局長）が駐米大使であった頃、彼が取引の仲介の中心人物であったことを疑う者はいない。国防省は巨大な利権の源泉なのである。このような国防省の最高ポストをサルマンは簡単に手放さないであろうが、スルトンの息子のハーリドやバンドルたちは国防省を自分たちの手に取り戻そうとするはずである。

ただスルタン家に一つの問題があるとすれば、父親亡きあとの兄弟の結束維持、すなわち一族の長と目される長兄ハーリドが弟たちに対して指導力を発揮できるかどうかである。スルタンには6人の妻との間に15人以上の息子がいる。ハーリドとバンドルは兄弟とは言え異母兄弟である。彼らがサルマン(あるいは他の第二世代王族)に対して一致団結できるのか。洋の東西を問わず異母兄弟が対立するのは珍しいことではない。実際スデイリ・セブンの長兄ファハド前国王が亡くなった後、遺産相続をめぐるムハンマド(東部州知事)とアブドルアジズ(国務相)の異母兄弟が対立、今ではファハド家は瓦解状態に近いと言われる。スルタン家はその轍を踏まないとは限らない。

これまでスルタン一人のものであった国防省は今後誰のものになるのでしょうか？

## **5. 振り出しに戻ったサウド家の後継者問題**

サルマン新国防相がアブダラー国王、ナイフ皇太子に次ぐ同国 No.3 であり、次期皇太子ポストの最短距離にいることは誰も疑わないであろう。しかもナイフとサルマンは同母兄弟(スデイリ・セブン)である。スデイリ・セブン兄弟が No.2 と No.3 ポストを占めていると言う意味では、アブダラー国王—スルタン皇太子—ナイフ第二副首相時代の序列と実態的には同じである。しかもアブダラー(88 歳)とナイフ(78 歳)は共に高齢であり、ナイフが持病(白血病と言われる)を抱えていることも兄スルタンと似ている。

サウド家の後継者問題は国王と皇太子のいずれが先に亡くなるかが最大の鍵であり、これまでとなんら状況が変わっていないと言ってよかろう(75歳のサルマンが二人より長生きすると言う前提ではあるが)。この場合もしナイフがアブダラーよりも先に亡くなれば、スルトンのケースと同様サルマンが皇太子になる可能性が極めて高く、そうなれば彼はいずれ国王になる訳である。筆者はサルマンは兄達の「腰巾着」として半世紀近くリヤド州知事のポストを維持できたに過ぎず、指導者としての能力に疑問があると考えているが、サウド家の承継は能力以外の要素で決ま

ることも否定できない。

次期皇太子の決定に重要な役割を担う「忠誠委員会」のメンバーは初代国王の息子や孫、曾孫であり、彼らがサウド家の内紛を引き起こすような過激な決定をするとは思えない。従って今回のナイフと同様サルマンが（たとえ能力に疑問があっても）皇太子に指名されると考えて間違いないであろう。たとえば悪いが日本の民間企業でも社長や会長の腰巾着が副社長になることは珍しいことではない。かつての関西の某電力会社の例がそれを示している。

問題はアブダッラーがナイフよりも先に死ぬ場合であろう。ナイフが国王に即位し、「忠誠委員会」が誰を皇太子に推挙するかが問題となる。序列としてサルマンが皇太子になれば同母の兄弟がサウド家の No.1 と No.2 を独占することになる。新しいスデイリ兄弟の支配構造が誕生し、彼らが自分の息子達を登用し、将来のサウド家の王位が彼ら一族の系統に継承される構図が生まれる。同じスデイリ・セブンでもファハド前国王やスルタン前皇太子の一族には陽が当たらなくなる可能性が高い。ましてスデイリ・セブン以外のファイサル家その他の王子たちは完全に日陰に追いやられるであろう。

新スデイリ・セブンの支配構造が復活することを恐れる王族は少なくない。18 男のタラール王子(80 歳)はその一人であり、数年前にナイフが第二副首相に選任された時、第二副首相は必ずしも次期皇太子を意味しない、と釘を刺した。しかし結局ナイフはそれまでの慣例通り皇太子になった。今やサルマンがナイフの後を虎視眈々と狙っている。

ナイフが新国王になった時、「忠誠委員会」はサルマンの皇太子選任を巡って大きく揺れ動くに違いない。スデイリ・セブン以外の第二世代の王子たちはスデイリー族の復活を快く思わないであろう。と同時に長期に権力を握って離さないナイフやサルマンなどの第二世代に対して第三世代の王子たちが異論を唱えるであろう。長幼の序が厳しいベドウィンの伝統を重んじるサウド家では第二世代の親に異論を唱えることはタブーであったが、今や第三世代も壮年から老年に達しつつあり、彼ら自身に残された時間は少ないのである。

特にスルタンの息子達の焦りは強いであろう。息子ハーリドは今回やっと国防省副大臣になったところである。ナイフ内相の息子で従兄弟のサウド(60 歳)は今回の人事で皇太子府長官に登用されたが、いずれ父親は内相ポストを彼に譲るつもりであろう。ハーリドと同年齢で同じく従兄弟、アブダッラー国王の息子ミッテーブは昨年父親から国家警備隊司令官のポストを譲られた。三人とも 60 歳を超えて(閣僚級と言う肩書は与えられているものの)未だ正式な大臣になれない。

現在のサウド家王族は一応全員平等と見なされているが、権力の構図は時間の経過とともに徐々に変化しつつある。サウジアラビアの王位継承問題は今後も注視し続ける必要がありそうだ。

(完)

(参考)

サウド王家家系図(初代国王の王妃とその子息たち)

<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-3bSonsOfAbdulazizByWife.pdf>

サウド家王族の閣僚・政府要人

<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-1MinisterAndProminentPrince.pdf>

サルマン国防相家々系図

<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-7SalmanFamily.pdf>

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601

Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642

E-mail; [maeda1@jcom.home.ne.jp](mailto:maeda1@jcom.home.ne.jp)

---

<sup>1</sup> <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0203SultanDeathNews.pdf> 参照

<sup>2</sup> <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0204SaudiCrownPrinceNaif.pdf> 参照

<sup>3</sup> Arab News on 2010/11/18, <http://arabnews.com/saudiarabia/article194607.ece>

<sup>4</sup> 詳しくは MENA ランキングシリーズ 18 「国防支出と兵力ランキング」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0165MenaRank18Defence.pdf>